法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-18

<特別寄稿>「学び」の原点？

佐藤, 典人 / SATO, Norihito

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
51
(開始ページ / Start Page)
57
(終了ページ / End Page)
58
(発行年 / Year)
2019-03-20

〔法　政　地　理
J. Geogr. Soc. Hosei Univ.
51, 57-58　(2019. 3)〕

特別寄稿

「学び」の原点？

佐藤 典人
（法政大学地理学会会長．法政大学名誉教授）

まだ我々の記憶に新しい，昨夏の甲子園を沸かせ，全国の高校野球ファンを魅了したのは，春夏連覇の偉業を成し遂げた大阪桐蔭高もさりながら，公立で，全国でも数少ない農業高校の，かつ地元から進学してきた生徒ばかりの，わが郷里・秋田代表の“金足農高旋風”であった．暑い夏の最中，まさしく孤軍奮闘よろしく，県予選から1人で投げ抜いていたあの吉田投手は，小生の秘かな願望からは逸れて，直接，プロ野球の道へ進むことになった．彼の身長176 cmは，投手としてはいささか物足りない．それゆえ当初，彼の描いていた北東北の某大学へ進学して，そこでの4年間を身体増強とプロレベルで通用するか否かのモラトリアムとして捉え，その後に自身の夢に挑戦しても遅くはないと，小生は勝手に想定していた．だから若干，不安な気持ちが小生にはある．

さて，これから記す事柄は，会員諸氏には“釈迦に説法”ながら，敢えて自戒の念を込めた綴りである．本会の学生会員の皆さんは，今日まで高校時代はもとより，それ以前から学校に通って『勉強』してきたことと推測する．交通の便に恵まれた都会はまだしも，小生のように田舎育ちの人間にとって，夏の風雨や冬の吹雪の中の田舎道を，小学生が徒歩で登校するのは，少なからず億劫であった．でも生憎，今は亡き母が教員だったので，学校を休むことにはかなりの躊躇いが伴った．また，どうして同じような年齢の生徒が数十人を1つのクラスとして学校で授業を受けねばならないのだろうか？（今で言う，乱暴ないじめっ子が居たし）と不思議に感じていた．“単にものを覚えるだけならば，自宅で教科書を手にして理解すれば済むのではないのか？”とさえ思っていた．現に皆さんの周囲に居るかも知れない，難関と称される『司法試験』の突破を目指して，ひたすら六法全書と首っ引きの人などは，朝から晩まで独りで机に向かっているではないのか？　この点が義務教育時代の小生の大いなる疑問であった．加えてある時，“人間，所詮，ものを覚えても片っ端から忘れるよ！　まして覚えたとしても到底，百科事典には敵わないよ！”と時の担任教師が言明した．“ならば何故？”と，先の疑問が益々，頭をもたげた．

来夏，東京五輪を迎える．これが東京では2度目の開催となる．1度目は舟木一夫の歌ではないけれど，小生の“高校3年生”の時だったから，1964年秋である．老化してもこの年次が咄嗟に脳裏に浮上してくるのは，秋田の片田舎で聖火リレーの走者を務めた際，トーチのマグネシウム？の燃える不快な臭いに閉口した記憶が強烈だったせいである．何ゆえにそんな役回りをする羽目になったのか？　それはその頃，没頭していたテニスの戦績が他人よりも少しばかり良かったためかと，勝手に解釈している．当然，これは絶対的に上手だという訳ではない．偏に他人との相対比較に他ならない．事実，上京後にとある場で自惚れ半分にそのテニスの相手をしたら，上には上が居るものである．フォアハンドもバックハンドも何のその，狙い打ちの乱打を繰り返す神技的な技量で，差し詰め現代ならば錦織圭の如く，まさに“お見事”と見とれるままに，感服せざるを得ない人物に出会い，己の下手さ加減を痛感した．それ以来，テニスから足を洗った．

こうしてテニスで他人との比較を通して，自分の未熟さを悟った小生であるけれど，上述の学校での『学び』も同様ではないだろうか？　クラスでは，計算が速い人，絵が上手な人，音感に優れた人，運動神経が抜群の人，記憶力が勝っている人などを，我々は何気ないうちに級友同士で比

べ，それを眩い目で内心讃えた体験を想起しませんか？　つまり，それは日々の学校生活の中で周囲の人との相対視を介して，自分という人間の長・短所や個性を無意識的に察知していたと置換できよう．換言すれば，それは『自己発見』であり，一般的に小・中学校の義務教育段階がこれに相当する．しかし残念ながら，独学はこのような自己認識を促す方向へ効果的に作用しない．むしろ年齢層の近似した男女問わずの多数が，一堂に会した集団でこそ，この認識に好都合な『場』が提供される．そこに学校へ登校して机を並べる意義があると，ある年齢に達して小生は納得した．

さらに次の段階で，人は如何にして自分という人間の成長を図るのかに時間を費やすことになる．これが『自己育成』の段階であり，多少の個人差はあっても，通常，高校から大学くらいまでがこれに該当しよう．そうした後，社会へ巣立ち『自己実現』のステージに推移し，人は自分の希望・可能性と，己の属する社会から求められている『期待』との合致を追求して力を傾注するであろう．

このように我々は，年齢を重ねる一方で『自己発見』➡『自己育成』➡『自己実現』の段階を歩んでいると思われる．この過程を順々に踏むには，ある程度の知識は要求されるだろうけれど，決してそれが全てではない．むしろ，自己発見や自己育成を通じて，直面する問題点を選出し，思考しては悩み，解決の方策を吟味しつつ自分で判断して決断し，到達した結果を理解して，それへの責任を逸らすことなく受け止め，更なる前進のための反省と改善という手順を辿るであろう．多分，学びの場はもとより実社会でも，現実にはこの繰り返しかと思う．実はこの一連の事柄を独自の力で履行することが『悟性』の発揮と言われる．よって，これを遂行できて初めて哲学的には『成人』に達した人間と口にされる．ゆえに哲学的な視座から俯瞰すれば，この世の中には，たとえ20歳を過ぎても『未成年』者が居るし，20歳未満でも『成人』は存在し得る．要は『悟性』を的確に言動に変換できる人間か否かが問われる．

本会の学生会員の皆さんには，大学で学を修めた証としての最終関門に『卒業論文』が待ち構えている．各自，大学時代の集大成としてこれを捉え，自らの**アタマ**でこの21世紀前半にこそ解明を図るべき課題を真っ白なキャンバス上に抽出し，その解決への方法を模索しては考慮・苦悩し，そして判断・決断して論考し，結論をまとめ，更にその方途に残置する未解明部分を識別しつつ，結果への責任を負うことが問われる．これこそ『悟性』を発揮する最終試験と位置付けられよう．だから卒業論文には自ら『思考』した独創性が基本的に求められる．かくて教師を含めた誰か他人から付与されるままの内容では，数学の定理を教わった直後のエクササイズ（練習題）のレベルを超えない．この点において，教わる側の学生も教える側の教師も真摯に熟考すべきであることに，これ以上多くの言説を要すまい．言い換えれば，自力飛行が不可能な“グライダー人間”の輩出では，“指示待ち人間”の域をいつまでも脱却できない．

ところで，冒頭の吉田投手の感心する点は，自らの癖や短所（投手としての上背の不十分さ等）を克服する意図から，工夫を凝らしつつ思考しては悩み，周囲の助言に耳を傾けながらも自分流に咀嚼し，それを試行錯誤的に実践して，徐々に自分に適った投手像を造り上げたプロセスに在る．しかも，投手ゆえに占有する勝負の結末を他人に責任転嫁しない．そこには高校生ながら，前述の『悟性』を働かせて取り組む『成人』の姿が瞥見される．

是非，本会の学生会員の皆さんにも『学び』の原点は何なのか？　に，今一度，思索を巡らせて欲しい．究極的には，独力で『悟性』を駆使して『思慮』する事がその要諦と言え，間違ってももものを覚える事ではない．かつて過ぎた事に拘泥するのは無意味だと小生にほざいた者が居た．そうだろうか？　人間は経験と結果をもとに自省しないのか？　かの“日光サル軍団”とて反省と学習は出来る．黒一色でとかく忌避されがちなあのカラス（属）ですら脳化指数や脳内比の値がとても高く，鳥類としては極めて利口に振る舞う．ならば，ホモサピエンスである我々人類はどうだろうか？「痩せたソクラテス」なんて悠長に口にはしていられまい．